

講演録

第2回笑学研究所公開講座

笑いの心理学 —関西人はなぜ笑う？—

講師：追手門学院大学笑学研究所所員 浦 光博

はじめに

ただ今ご紹介いただきました、追手門学院大学笑学研究所の所員の浦でございます。

私は、心理学部の教員でもありまして、当然のことながら、心理学を研究しています。今日のメインタイトルが「関西の笑い」ということですので、関西人はなぜ笑うのかというお話を心理学の立場からさせていただきたいと思っております。

笑学研究所は言うまでもなく研究所ですので、何か研究をしないわけにはいかないのですが、だいたい笑いというものを研究してしまいますと、面白くないことが多いですね。ある方がこんなことを言っていました。笑いを研究するなんていうのは、カエルの解剖のようなものだ。第一、そんなものは見たくもないし、カエルが死んでしまう、ということです。つまり、研究をすればするほど、面白くなくなってしまうんですね。ですから、私の話にあまり面白さを期待しないで下さい。その分、最後に横田先生がどっと笑わせてくれますので。

ちょっと退屈かもしれませんが、しばらくお付き合いいただければと思います。

早速ですが、ちょっと堅そうな話から始めます。ソクラテスという古代ギリシャの哲学者のことです。彼は哲学者としてとても有名な方なのですが、もう1つ有名なのは、奥さんが悪妻だったということです。とにかくソクラテスの奥さんは怖い人だったらしいのです。クサンティッペという名前の女性で、金にならん哲学みたいなものばかりしやがってと、夫のことをぼろくそ言っていたらしいです。この話が本当かどうか、いろいろ諸説あるのですが、一応、悪妻の夫であるということでも、とても有名な方です。

それとともに、この人はとても面白い人だったらしいですね。ユーモラスで、ジョークを飛ばして、絶妙な掛け合いで人を笑わせながら哲学を説いた方であったということです。

このソクラテスが面白いことを言っています。「結婚はしておいたほうがいい。もし、良妻なら幸せになれるし、悪妻なら哲学者になれる」と言っていたとのこと。これも本当かどうかはわかりません。後から付け足すということはよくあるので、何せ、紀元前の話ですからね。実際のと



図1 笑っているように見える
チンパンジー



図2 笑っているように見える
ネコ



図3 笑っているように見える
イヌ

果たして本当に笑い学の祖のアリストテレスが言ったように、笑うのは人間だけなのか。それとも、もともとこういう動物のこの表情というものが、人間の笑いのルーツなのか。進化的に考えれば、もしかしたらそうかもしれませんね。

これは、そもそも笑いとは何かという定義の問題でもあるだろうと思います。これら動物の表情を笑いと言ってしまえば、動物も笑うということになるし、いや、これは人間の笑いとは違うんだと言ってしまえば、笑うのは人間だけということになります。

要するに何を言いたいかというと、笑いそのものが非常に定義も曖昧ですし、哲学者が言う笑いと心理学者が言う笑いと社会学者が言う笑いとでは、それぞれに違うかもしれません。そういった意味で、研究という観点から考えますと、笑いというのはとても一筋縄ではいかないテーマなんです。

また、笑いとユーモアとは同じかという問題もあります。先ほど見たチンパンジーは笑っているように見えるし、ネコもイヌも笑っているように見えます。たとえあれを笑いだと考えても、おそらくチンパンジーにも、ネコにも、イヌにもユーモアはないと思うんですよ。ジョークを連発するチンパンジーには会ったことがないですからね。そういった意味では、おそらく笑いとユーモアには共通部分もあれば、違う部分もある。進化論的に見れば、チンパンジーなんか持っているあの表情というものは、おそらくわれわれ人間にもあるだろう。そこに、人間独自の知性というものが上に乗って、ユーモアというものが出来上がったのではないかと考えられますね。

他にも、デュシェンヌの笑いと非デュシェンヌの笑いというのがあります。デュシェンヌというのは人の名前です。そしてデュシェンヌの笑いとは何かというと、心から面白くて、おかしくて笑うというもの。そして、非デュシェンヌの笑いとは何かといいますと、愛想笑いとか、追従笑いとか、あるいは、べつにお愛想でも追従でもなく、人と人がすれ違うときに、ニコッと笑いながら「こんにちは」と言うような、いわゆる社交的な、人間関係をつくっていくために、おかしくもなく笑うということを非デュシェンヌの笑いと呼びます。これらデュシェンヌの笑いと非デュシェンヌの笑いというのは果たして同じなのか、違うのか。同じであるならば、どの部分が同じなのか。これも心理学上、非常に重要な問題ですが、なかなか解決の難しい問題です。



私は枝雀さんの落語が好きで、生前はよく落語会に足を運びました。「笑い転げる」という言葉がございますね。いくら何でも笑って転げ回らんだろうと思っていたら、お客がほんまに転げ回っていましたからね。枝雀さんが落語をすると、椅子に座っている人が笑い過ぎて転げ落ちるんです。それぐらい面白かった。

枝雀さんもこんなことをおっしゃっていたし、さまざまな研究者も、どうやら共通項として脅威とか緊張、違和感、そういったものから解放されたときに、人は大笑いをするともあれば、クスッと笑うこともある。どうやらここに笑いというもののルーツがありそうだということは、緩やかな形で研究者が共有しているところかなと思います。

心の余裕と笑い

そう考えたときに、どんな人がよく笑うのかということが心理学者としては気になる。今も言いましたように、脅威や緊張からの解放とか、あるいは緩和。こういったものが笑いの条件だとすると、やっぱり嫌なことが起こったとき、緊張することが起こったとき、脅威が起こったときに、それをポンと突き放すことのできる心の余裕のある人の方が良く笑うのではないかと考えることができます。逆に、何か追い詰められて、毎日生きるのが大変だという人は、笑っている暇はないと思うんですね。でも、追い詰められても、ちょっと心に余裕があって、それを客観的に見ることができる人は、きっと追い詰められているだけの人、心に余裕がない人と比べると、よく笑うんじゃないかということが考えられます。つまり、心に余裕のある人は、ない人よりもよく笑うんじゃないかなというのが1つの仮説として浮かび上がります。

では、ここで言う心の余裕って、何でしょう。心理学者なんだから、心の余裕とは何かという問いぐらいにはスパッと答えろと言われるかもしれませんが、実はなかなか難しいんですね。そもそも、心とは何かという問題が実は難しい。私は心理学の勉強をし始めてもう40年経ちますが、いまだかつて、一度も心を見たことがないんです。皆さんは心を見たことがありますか。どんな形をしていますか。そもそもどこにあるんでしょう。どんな色をして、どんな形で、どんな香りで、どれぐらいの重さなのか、見たことがないですね。その見たこともないものを研究しているのが心理学者です。

それでも、われわれ心理学者というのは、データがないとものと言えないというちょっと悲しい習性がありますので、その目に見えない心の余裕を何とか目に見える形で捉えてデータをとろうと思ったわけです。そこで、とてもわかりやすい心の余裕を今回は2つ扱いました。1つはお金、年収です。金持ちは余裕があります。金持ちはけんかをしない。心に余裕があるからです。逆に余裕がない人というのはどんな人なのか。もちろんお金持ちに余裕があるとすれば、お金持ちでない人は余裕がないということになりますが、それだったらあまり面白くないので、今回は余裕の無さを孤独感として捉えました。孤独な人って、あまり笑いそうにないですよ。笑っていたら、何と



なく怖いですよ。

こういった観点からデータを採って見たのです。そのお話を今から少し、堅いお話になりますけれども、お聞きいただきたいと思っています。

実証的研究 (1) 一心に余裕のある人はよく笑うか？

実証的研究 (1) です。「心に余裕のある人はよく笑うか」というテーマです。経済力と対人関係の2つの観点から心の余裕を捉えました。経済力というのは年収です。対人関係というのは孤独かどうかです。それと、楽観性も一応押さえとして測定しました。当たり前といえば当たり前なのですが、楽観的な人はよく笑うということです。

経済的な余裕については、それを世帯収入として捉えるのか、個人々の収入として捉えるのかという、ちょっと厄介な問題があります。心理学的には、さまざまなものに関連するのは世帯収入の方だということが分かっています。自分が個人としてお金をどれくらい稼いでいるかではなく、家族全体としてどれくらいお金を稼いでいるかというのが、さまざまな心理的な現象に効きやすいということが分かっているので、今回も世帯収入を使いました。

対象は、全国47都道府県の20代から80代の男女600名です。男女各300名ずつからデータをいただきました。

笑いについては、過去2カ月の間に笑うこと、大笑いすることがどれくらいあったかを答えていただきました。そのような経験が、「まったくなかった」から「とてもたくさんあった」までの5段階で回答してもらいました。これを笑い経験としました。次に、ユーモア経験についても問いました。同じく過去2カ月の間にユーモラスな気分になることなどがどれくらいあったか。「まったくなかった」から「とてもたくさんあった」までの5段階です。高得点ほどよく笑い、あるいは高得点ほどユーモラスな経験になることが多かったというように数値化しています。

まず全国の600名全部のデータを分析したところ、こんな結果でした(表2)。星印が付いているのが、統計的に関係があるということを意味します。星印が付いていないのは、全然関係ない。つまり、笑うとかユーモア経験は年齢に関係なく、若者であろうと、高齢者であろうと笑うという

表2 世帯収入、孤独感、楽観生徒笑い経験、ユーモア経験との関連 (全国のデータ)

変数名	笑い経験	ユーモア 経験
世帯年収2	.109**	.113**
孤独感	-.190**	-.208**
楽観性	.344**	.239**
性別	.199**	.107**
年齢	-.059	-.009
R^2	.311**	.212**

**p<.01



表3 世帯収入、孤独感、楽観生徒笑い経験、ユーモア経験との関連（関西のデータ）

変数名	笑い経験	ユーモア 経験
世帯年収2	.020	-.027
孤独感	-.024	-.076
楽観性	.582**	.447**
性別	.205**	.158†
年齢	-.139†	-.087
R^2	.376**	.256**

**p<.01, †p<.10

ことが分かります。星印が付いているのが、統計的に意味のある関係とご理解ください。数字の前にマイナスが付いているのは、逆を意味します。ちょっと比喩的に言えば、反比例みたいなものだと考えてください。マイナスの付いていないのが、正比例のようなものです。

この結果が何を意味しているかということ、まず、やはり世帯収入が効いてきます。お金持ちほどよく笑うし、ユーモア経験も多いということです。そして、孤独感にはマイナスが付いていますから、孤独な人ほど笑わないし、ユーモラスな気分になることも少ない。楽観的な人は、よく笑う。当たり前といえば、当たり前ですね。この結果は、私たちの直感的な理解や経験によく一致する結果だと思います。楽観的な人ほどよく笑うし、世帯収入の高い人ほどよく笑うし、孤独な人ほど笑わないということです。

では、関西はどうだろうかということで、関西に住む人たちのデータだけを取り出して、同じ分析をしてみました。どこまでを関西に入れるのかが、なかなか難しいところですが、今回は滋賀、京都、兵庫、大阪、奈良、和歌山。この6府県を関西圏としました。

この関西圏に住む人たちだけのデータを取り出して、同じ分析をしてみたところ表3の結果になりました。ご覧のとおり、世帯収入についていた星が消えていますよね。孤独感についていた星も消えています。これは、関西人は金持ちであろうと、貧しい人であろうと、笑う。さみしい人であろうと、さみしくない人であろうと、笑うことを意味しています。この結果は、関西人の笑いには独特の何かがあるんじゃないかなということを示唆しています。

実証研究 (2)－関西人はなぜ笑う？

そうすると、やっぱり関西人は何で笑うのかと。金持ちでもないのに。もちろん、貧しい人が笑っちゃいけないということではありません。でも、全国的な傾向としては、経済的に貧しい人よりも豊かな人のほうがよく笑い、ユーモア経験も多いのに、関西では、経済的な豊かさの影響は見られない。孤独感についても同じことが言えます。全国のデータを見ると笑いやユーモアの経験に孤独感が関連するのに、関西では孤独かどうかにかかわらず笑う。これらは関西のととても良いところと言って良いのかもしれない。



これはもう心理学の範囲にとどまる話ではないですね。文化人類学とか社会学のテーマとしても捉えられると思うのです。あるいは、歴史学かもしれません。

いわゆる商都、商いの都の大阪。商売をスムーズにやるために、常に人との会話の中にユーモアをまぶして、ぎくしゃくしないようにする。そういう文化的ルーティンが関西にはあるのではないか。ルーティンというのは決まり切ったやり取りみたいなものです。結構シビアな経済的なやり取り、お金のやり取りというものに笑いをまぶして、クスッと笑わせて和ませよう、できる限り角が立たないようにしていこうというような、そういう文化というのが、大阪を中心とする関西圏にはあるのかもしれないということです。これはべつに心理学者のオリジナリティーでも何でもなくて、昔から言われていることです。

こういった観点から、もう一度違うデータを探ってみました。先ほどのデータとはまた別のデータですが、これも全国47都道府県、20代から80代の男女600名からデータをいただきました。

この調査では周囲の人々の特徴について聞きました。「あなたと日常的に付き合いのある周囲の人たちの中に、次のような人はどれぐらいいますか」という問いです。この問いに対して、「ほとんどいない」から「とても多い」までの5段階で答えていただきました。

大きく3種類の人たちのことを想定しました。温かな人たち、有能な人たち。そして、笑わせようとする人たちの3種類です。この3種類の人たちがどれぐらいいるのかを聞いたのですが、その時にずばり聞くのではなくて、複数の角度から聞いています。表4をご覧ください。まず、優しい人、親切な人、温かい人が1つのまとまりになります。こういった人たちが、あなたの周りにどれぐらいたくさんいますかという問いです。

2つ目が、何をやらせてもそつなくこなす人、仕事のできる人、勤勉な人。いわゆる有能な人のことです。このような人があなたの周りにまったくいませんか、たくさんいますかという問いで

表4 対人環境についての因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
優しい因子				
優しい人が	1.001	-.072	-.039	.868
親切な人が	.844	.039	.002	.765
温かな人が	.748	.158	.027	.780
有能さ因子				
何をやらせてもそつなくこなす人が	-.125	.870	.070	.663
仕事のできる人が	.155	.671	-.002	.624
勤勉な人が	.251	.580	-.119	.536
ユーモラスさ因子				
ちょっとした会話でも、笑いをとろうとする人が	-.006	.003	.816	.664
何かにつけて話にオチをつけようとする人が	-.092	-.020	.809	.579
冗談好きな人が	.317	.043	.517	.569
	因子寄与	4.084	3.588	2.646
	α係数	.921	.807	.790
	ω係数	.925	.816	.813
	因子間相関	第2因子 .730	第3因子 .445	



す。

3つ目が、ちょっとした会話でも笑いを取ろうとする人が、何かにつけて話にオチを付けようとする人が、冗談好きな人が、それぞれあなたの周りにはあまりいませんか、たくさんいますかという問いです。これらを合計しまして、温かな人、有能な人、笑わそうとする人のそれぞれが周りにたくさんいる人もいれば、そうじゃない人もいるということの数値化したわけです。

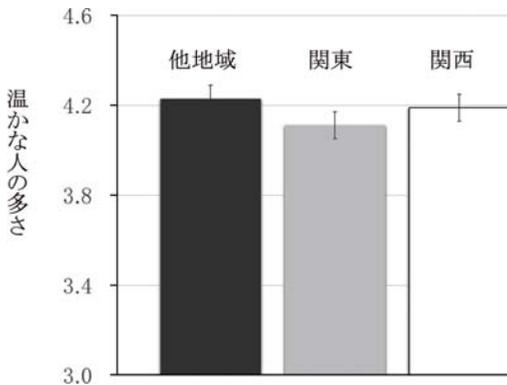


図4 地域別「温かさ人」の多さ

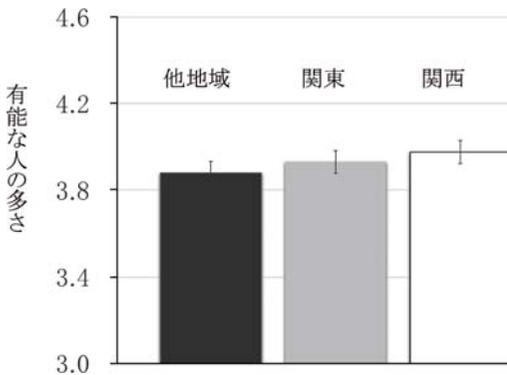


図5 地域別「有能な人」の多さ

これを関西と関東とそれ以外の地域に分けて分析してみました。図4をご覧ください。このグラフは、縦に行くほど温かな人が多いことを示しています。5点が最高点ですから、どの地域に住む人でも4.2前後の値になっているというのは、温かな人が周囲に結構いることを意味します。ちょっと関東が低いように見えますか。こういうのを見ると関西人は喜ぶんですね。関西人のほうが温かいとか、人情味があふれるとか言うのですが、これは誤差の範囲ですから、ほとんど意味がありません。ほぼ同じレベルに温かな人はいるということです。

なぜでしょうね、これは。関西人は関東のことをちょっとマイナスに言うと、異様に喜びますよね。むしろ、関東に対するコンプレックスが丸出しになっていると思ったりしないでもありませんが、少なくとも今回の結果を見る限り、どうやら温かな人の多さに地域差はなさそうです。

では、有能な人はどうか(図5)。これもちょっとだけ関西が多いように見えます。でも、これも、皆さん、喜んじゃいけません。誤差の範囲です。別の機会にデータを採れば、いくらでもひっくり返るぐらいの本当にわずかな差ですので、べつにこれだからといって、関西人が他の地域より有能とは言えません。有能な人の多さにも地域差はないということになりました。

さて、次です。もうそろそろオチがわかりますか。私は豊中生まれの豊中育ち、33歳までずっと豊中で過ごしてきました。大阪で生まれ育った人は、やっぱり厳しいところがあります。特に男の子。何をしゃべっても、しゃべり終えたと思っても、友だちがじいっと待っているんです。うん、うん。で？ で？って、何？。いや、オチは？って。オチを求められるんですね。特に男の子はそうして鍛えられる。鍛えられてもちゃんと育たない人もいれば、ちゃんと育つ人もいますけ

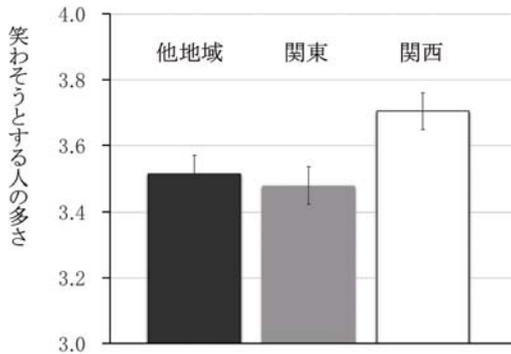


図6 地域別「他者を笑わそうとする人」の多さ

ど。

オチの話にいきましょう。笑わそうとする人の多さについての結果が図6に示されています。これは皆さんの期待にたがわない。やっぱり笑わそうとする人は関西が断トツに多いですね。これは誤差の範囲ではありません。同じ調査を何回繰り返しても、おそらくこういう形のグラフになる。どうやら、やっぱり関西というのは、笑わそうとする人が他の地域と比べて、少なくとも受け取る側の認識としては多いよう

に認識されている。

この結果について、さらに気になるところがあるかもしれませんね。この笑わそうとする人について、表4にあるように3種類の人を想定したわけですが、どのタイプが一番効いているかが気になるという人もいますかもしれません。これについても、皆さん、先ほどの話からお分かりですね。実は、一番効いているのは表4のユーモラス因子の2番目の項目です。何かにつけてオチを付けようとする人というのが、やっぱり他の地域と比べて圧倒的に多いというのが、もう少し詳しく分析をした結果です。

ちなみに、先ほど申し上げました関西の6府県で比較してみても、実は6府県の間には差はありません。ですから、商都大阪だけではなくて、関西圏内での笑わそうとする人の多さに関しては、おそらく地域差はないのではないかなと思います。

ここに関西人の笑いの特徴が出ているように思われます。お金持ちでも、貧しい人でも、孤独な人でも、孤独でない人でも、関西人は笑います。関西以外の地域はそうではないのに。

関西独特の言葉で「笑かしよんな」という言葉がありますよね。これらの分析結果は、関西にはそういう笑かす人が多いということを示しているようです。

言い方を変えれば、関西人の対人的な環境には、笑いが当たり前のようにあるということです。とすると、関西に住む人にとって笑いは空気みたいなものですよね。でも、関西の中でも周囲に笑いの少ない人もおそらくいるだろうと思うのです。私の周りにはそんなに人を笑わせる人はおらへんでという人もいるだろうと思うのです。そうすると、当り前のものがないと、もしかしたら、つらいことが起こるのではないかというのが、次の予測として出てきました。これについても分析してみました。

その結果が図7です。縦軸が日常的に感じる快感情の程度です。愉快であったり、面白かったり、幸せだったり、そういう快感情を縦軸に取りました。上に行くほど、日々快適な感情で過ごしているということです。あなたの周りに笑わせる人が多いですか、少ないですかという問いに多いと答えた人たちは、実は関西でも、他の地域でも、快感情には差がない。やっぱり周りに自分を笑

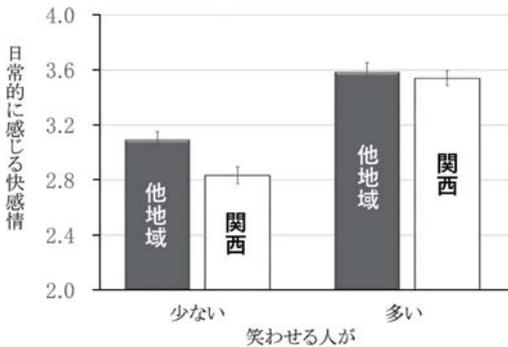


図7 笑わせる人の多寡と日常に感じる快感情との関連の地域比較

わせてくれる人が多いと思っている人は、この地域に住んでいようと日々愉快地に過ごすことができるということがわかりました。

問題は、笑わせる人が少ないと思っている人です。関西では笑わせる人が周りに少ないと、他地域と比較して日常に感じる快感情が低いのです。

要するに、関西人というのは、どちらかというところ、孤独感とか、お金持ちとかという自分が持っているもので人より多く笑うとか、笑わな

いとかなというよりも、自分の周りの対人的な環境に影響されて笑ったり、笑わなかったりするようです。その笑ったり、笑わなかったりが、日々生活をしているときに日常に感じるちょっとした愉快さとか快適さ、あるいは幸せ感というふうに言っているのかもしれませんが、そういったものに差を生じさせる。こういうところに、どうやら関西特有の笑いの特徴というのがあるのではないかなということが、これら一連の調査結果から分かります。

考察

以上の結果について、もう少し別の観点から考察してみたいと思います。最初の方で少し触れましたが、笑うと心身共に健康になるというようなことが言われています。実は、これが果たしてどれくらい射的を射た主張なのかについては少々微妙です。実際、笑うと免疫力が高まったり、心身共に健康になったりするという結果を示す研究は少なくありません。こういったテーマについてさまざまにおこなわれた研究を精査した研究者がいます。アメリカ人のとても高名な、マーティン (Martin, 2001) というユーモア研究者です。彼のレビューによると、笑いが健康に及ぼす影響は、多くの人が信じているほど強くはないようです。笑う人のほうが笑わない人よりも、わずかに健康であるという程度にとどまるようです。それでもやはり、よく笑う人というのは、笑わない人よりもわずかではあるけれども、心身共に健康だということです。

ところで、関西人が他の地域の人よりもよく笑うかについてもデータを分析してみました。地域の差はありませんでした。しかし、先ほどお示したように、周囲に笑う人がたくさんいるかどうかと快感情との関連については関西とそれ以外の地域とで差が見られます。つまり、関西に住む人たちにとって、日々快適に過ごせるかどうかの程度が、周囲に笑わせる人が多いかそうでないかで変わってくるということです。

こういったところから、先ほど社会学や歴史学などで検証されている、大阪を中心とする関西。いや失礼。大阪が関西の中心と言うと、他の地域の人は怒りますけれどもね。特に京都の人なんか



ね。ごめんなさいね。京都の関係の方がいらっしゃったら、ごめんなさい。わりと、京都の方が中心やという人が多かったりするでしょう。大阪に対しても厳しいのですが、滋賀県にも厳しいですよ。ね。「琵琶湖県」とかと言ったりしてね。そうすると滋賀県の人は怒るんです。「そんなことを言うたら、琵琶湖の水、止めたるぞ」とか言うてね。

でも皆さん、ご存じですか。琵琶湖の水が止まったら大変なことになるそうですね。もちろん京都、大阪には水が来ませんよね。でもそれだけではないのです。「琵琶湖の水、止めたるぞ」と言われたら、「おう、止めてください」と言い返せばいいらしいです。何と琵琶湖水を止めたら、水位が80メートル上がるらしいですね。そうすると滋賀県の市街地は水没してしまうらしいです。

ちょっと話がずれましたけれども、要するに、大阪をはじめとする関西では、どうやら人を笑わせる文化的に決まり切ったやり取りというものがある、それ故に、われわれは自分が持っている資源、経済的な資源の多寡とか孤独感の高低とかに関係なく、笑う。ある意味、これはおそらく関西に住む人間にとってもとても良いことではないかと思えます。特に、笑いがわずかではあっても人を健康にするのであれば、自分の中にある心の余裕がなくても、周囲の人たちが笑わせてくれる関西の対人的な環境は、とても望ましいものだとと言えるのではないかというのが、今回、一連の調査をして、私が得た感触です。

私の話は以上でございます。ありがとうございました。

引用文献

- Hurley, M. M., Dennett, D. C., & Adams, R. B. (2011). *Inside jokes: Using humor to reverse-engineer the mind*. MIT press. (片岡宏仁 (訳) (2015). ヒトはなぜ笑うのか-ユーモアが存在する理由-. 勁草書房)
- Martin, R. A. (2001). Humor, laughter, and physical health methodological issues and research findings. *Psychological bulletin*, 127, 504-519.